
第9回世界林業会議に出席して

藤 村 隆

I. 全体の感想

第9回世界林業会議は、去る7月1日～10日までメキシコ市において、世界百余か国から千人以上が出席して行われた。今回は、「国際森林年」を意義づけることもあって、前回(1978年)のジャカルタ市における会議に比べて、出席国数、出席者数及び発表者数も多かったと聞いた。我が国からは、田中恒寿林野庁長官をはじめ、官民合せて8名が出席した。

会議の全体の空気は、メキシコ政府の周到な準備と巧みな運営、各国の森林資源に対する関心の高まりによって、和やかな中にも緊張感が充満していた。民族衣装で飄々としてしばしば登壇するインド代表、自らの発言に陶醉して絶叫調になったキューバ代表、座長がフランス語で発言時間の超過を告げても「あなたの言ったことはわかりません」とマイペースで発言を続ける中国代表などは、ひんしゅくを買うどころか、拍手がおこりかえって緊張感を和らげるのに役立った。また、お揃いのユニホームを着たメスティソと思われる洗練された女性が、連絡、案内、相談などのため、会場の至るところに配置されていた。彼女たちが会場の明るいふんいきと、会議のスムーズな進行に大きな効果を果していたことは見逃せない。会議を通して教えられたこと、考えさせられたことは多かったが、これらは限られた紙数の中では到底報告できない。そこで、今後の会議に期待しつつ強く感じたことだけについて述べる。

全体会議、分科会を通した主要国別の発表件数を拾ってみると、主催国のメキシコ(34)を筆頭として、アメリカ(21)、カナダ(19)、オーストラリア(10)、スペイン(9)、フランス(8)、イギリス(8)など欧米各国の発表件数が全体(203)の半分以上を占めたのに対し、アジア、アフリカ各国からの発表件数が少なかったことである。発表件数は多ければよいと言うものではないにしても、欧米の各国がこのような国際会議を通して、世界的展望の中で自国を位置づけつつ、森林資源に関連する問題の所在を明らかにしようとする姿勢が窺えた。また、アジアの中では中国の発言が最も多く、各国から注目されていたし、さらに、次回会議の開催国として立候補しているソビエトが、2件の発表と少なく、同じく次回会議の開催国として立候補しているフランスの万事積極的な行動とおもしろい対照をなしていた。

FUJIMURA, Takashi: Participating in the Ninth World Forestry Congress
海外林業コンサルタンツ協会

各国出席者の顔ぶれをみると、林業行政機関のトップグループと、林業試験研究機関のトップグループ及び若手研究者が多く、その中には我が国へ研究又は国際協力事業団の研修で来日した経験者もかなり含まれていた。特に年長の大学教授や、林業試験研究機関の研究者で、再会をよろこび、交歓し合う情景がみられた。また、今回の会議は10日間の長い期間であったため、分科会に入ってからかなり出席者が少なくなるものと思っていたが、予想に反して出席者の途中帰国が少なく、特に林業行政機関のトップが悠々と会議が終了するまで滞在したあと、欧米の各地を回って帰国すると言う国もみられた。

これらのことは、その国によって事情が違うので、批評を加えることはできないが、より多い情報を収集するとともに、その国の森林・林業を各国により理解させる上からは、我が国の行政・研究機関のメンバーも、より余裕のある日程が与えられるべきと、大いに考えさせられた。特に各国から多くの研究者が出席し、その中の幾人かから「日本のM博士は来ているか」「A博士はなぜ出席しなかったのか」と言った質問を受け、返事に窮したが、その度に深く考えさせられた。

出席者の多くが利用し好評だったのは、会議期間中地階において、林業に関する書籍類の展示と販売、コピーサービス、木工製品・絵画の展示、コーヒー及び清涼飲料のサービスなどのコーナーが設けられていたことであった。その中でも好評だったのは書籍類のコーナーで、会議中でも人の絶え間がなく、臨時に設置された郵便局には、購入した資料を郵送する人の列ができていた。

しかし、惜しむらくは書籍類の数が少ないことと、郵送用の包装紙や紐が販売されてないことであった。書籍類の販売はそれほど重視すべき問題でないかも知れないが、出席者の中には自国での入手が困難なため、資料を購入するために会議に来たと言う人もあり、考えさせられることであった。販売されていた書籍は、森林土壌、育苗、造林に関するものが多く、天然林の施業に関するものは見当らなかった。これは、東南アジアの熱帯林の開発の現状及びこれから開発しようとしている各地の熱帯林を考えると、最も重視すべきはこれら天然林の取り扱いであるにもかかわらず、天然林施業の研究があまり進んでいないことを意味していると言えよう。

土曜日に行われたエクスカージョンで残念に思ったことは、折角メキシコ市郊外のマツ類の天然林と人工林の中を通りながらバスの窓から眺めただけで終わったことである。これには、数百人をバス十数台で運ぶ関係上時間がなくそうせざるを得なかったそうであるが、それにしてはトルカ市で午後いっぱい、カウボーイの演技と昼食に費してしまったり、やはりラテンアメリカのお国柄であろうか。出席者の中には恨めしそうに、疾走する車窓から人工林を眺めて歎息する者もいたが、主催者の側では、遠来の客にせめて週末は楽しんでもらおうと言う暖かい配慮がなされたので善意に解釈しなければならない。それと、2～6時まで昼食の時間に当てられたが昼食をとりながら音楽に熱中できるメキシコ人とメキシコ社会をもっと研究しなければならないと思った。

また、仄聞した話であるが今回の会議は、開会式にデ・ラ・マドリ大統領が出席し

たことでもわかるように、政府が経済の回復、安定を各国に印象づけるために利用したと言うことである。その意図がどこにあるかと詮索する必要もないが、豪華な昼食を前にしたときそれが裏付けられたような気持になった。



写真-1 分科会での報告（海外林業コンサルタンツ協会
名村二郎氏、左側は座長団）

II. 会議の要約

つぎに、今回の会議の要約を、最終日に配布された資料に基づいて述べることにする。

第1分科会

この分科会のテーマは「森林資源の管理における動向と新しい寄与」であり、7つの基本テーマと、サブテーマとして51の特別報告があり、これらを討議した結果、一般的勧告と7つの勧告をまとめた。

(1) 一般的勧告

i. 国際協力並びに意見交換（経営方式、森林火災、消火、乾燥地帯の樹木等の利用、森林資源の調査方法等の新しい技術）を強化する。 ii. 研究調査並びに技術移転（農村の開発特に育林、アグロフォレストリー、森林病虫害、育種、流域管理モデル等）を強化する。 iii. 技術並びに作業職員へのより有効な研修（特に森林消防活動と、森林並びに人工造林地の経営）。 iv. 政策決定段階で関係当局による林業への関心を高める v. 森林資源の保全にあつては、林業の文化、普及活動を通じて資源保護、野生鳥獣の管理などに、林業として積極的に参加する。 vi. 林業はもはや孤立しては考えられない。多目的利用によって農業や牧畜業と共同しなければならない。

(2) 7つの勧告

i. 森林資源並びに野生鳥獣の育成、経営、保全保護

①育成、経営については、経済的収益性の原則、環境の安定と社会ニーズの充足、均衡のとれた林業投資に則って、できれば天然更新により、かつ地元住民の積極的参加を求めて行う。 ②森林の保護については、生物管理技術の推進、病虫害防止策の強化など専門分野間の協力を進める。 ③野生鳥獣と国立公園の管理については、生態的バランス、環境との関連を明確にするとともに、社会経済的並びに現実的便益を認識する。

ii. 森林破壊防止に向けての林業活動

①乾燥地帯の収穫量を増大させる樹種の選定並びに普及を考える。 ②統合的、多面的経営（農村社会の参加を含めて）に向けての政策を立てる。

iii. 人工造林地

①工業、農業、林業、放牧、その他の保護用の造林地を増大する必要がある、そのために技術的、科学的な計画（樹種の選定、資金調達等を考慮した合理的かつ実行可能な目標）が必要である。②これらの活動と併行して自然の生態系の保全を考える必要がある。

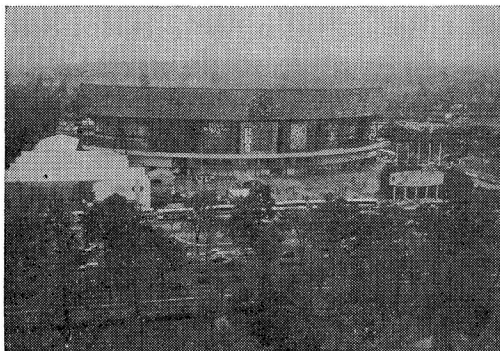


写真-2 開会式が行なわれた国立講堂

iv. 林業における遺伝子資源

①個体群の動態、生態系的な研究とともに、遺伝子資源の保全を経営計画に含める必要がある。②これらの遺伝子保全について、社会的関心を促す努力が必要である。

v. 森林資源の保護機能並びに環境サービス

①流域管理について、適正な情報、調整、専門分野間の協力等を考えて、数学モデルの開発利用が必要である。

vi. 林業に及ぼす開発のインパクト

①森林破壊は特に熱帯地域において急速に進んでおり、長期的、短期的なマイナスの影響について、政治的に覚醒を促す必要がある。

vii. 森林資源の評価並びにその保続的管理

①政策及び計画設定のために、資源を保続的に管理（監視）する。②新しい技術を採用するために、国際的ネットワークを設けて努力する。③林業調査のための有効な組織（必要な資金の確保とともに）を設ける必要がある。

第2分科会

この分科会のテーマは「生産及び生産性についての動向と新しい寄与」で、6つの基本テーマと、7つの基調文書と40の特別論文が提出された。討議の結果、一般勧告と特別勧告が行われた。

(1) 一般勧告

i. 生産技術は、地方条件に適応したもので、かつ技術の選択に影響する経済的、社会的な面を考える。ii. 森林内やその周辺に住んでいる人々が、積極的に工業プロジェクトに参加し、それによって最大限の便益を受けられるようにする。iii. 木材利用産業を考えるに当たっては、木材製品だけでなく、他のものについても考える。

(2) 特別勧告

i. 林業経営と原材料の供給とを密接に連携させることが重要である。ii. 林産業プロジェクトの評価に当たっては、そのプロジェクトの存立に影響を及ぼすあらゆる面を考慮する。iii. 林産業が適切であるかどうか（地方条件を考慮して）を決定する

方法論が必要である。 iv. 木材利用エネルギーについては、政府のエネルギー政策に沿って、公共と民間との協力が必要である。 v. 国産燃料として薪炭の有効利用について、ストーブの改善、林産業廃材の利用を行い、余った電力を農村や合板工場等へ配電することを考える。 vi. 開発途上国については、競争的、能率的生産が重要であり、保護主義はとらない。政府は、林産業の競争を刺激するために、弾力的な行政を進める。 vii. 情報の普及（特に林産業の生産状況、設備能力等）についての改善、農村の組織の代表者と林業関係者との対話が必要である。 viii. 生産に必要な融資について、人工造林についてはその返済期間の延長が必要である。

第3分科会

この分科会のテーマは「制度並びに農村開発における動向と新しい寄与」であり、6つの基調文書と53の特別論文が提出された。

i. 林業政策並びに立法

①林業政策は、公的な林業行政だけでなく、林業部門を全国的、地域的に結びつけて施行する。 ②林業政策は、森林資源に課せられた役割に特に注意を払う。 ③林業政策は、林業知識の吸収、研修、普及等の手段となる。 ④林業法令は、林業政策の手段として、また、施行に当って融通性のある枠組をつくるものとして役立たせる。

ii. 林業行政

①林業行政は、林業部門組織に加えて、関連部門（民間、任意団体の組織）の機関とともに行わなければならない。 ②必要とされる懲戒手段として、林業行政の中に新しい規律を取り入れるべきである。国内の林業教育並びに研修機関として密接に結びつける必要がある。

iii. 林業科学、技術及び研究調査

①開発途上国の研究調査は緊要であり、社会的、経済的、環境的なニーズを満足するものとして、国際的な援助が必要である。 ②林業並びに林産物の研究調査を優先させ、その結果を監視し、評価する世界的な組織を確立する必要がある。

iv. 林業教育

①技術的、職業的な施設の拡充及びその質の改善が必要であり、特に現業に重点をおき、職場内教育や研修が必要である。 ②林業教育は、林業家だけでなく、農家などの関係者についても、林業知識を与える必要がある。

v. 農村開発の診断と指導

①総合的農村開発の受益者として農村住民の役割の必要性を強調しているが、独立能力を有する小農組織をつくるよう指導するのは時期尚早である。 ②メキシコでは、小農が熱帯林の利用、資源の地域計画、より大きな経済的便益の取得等に独立能力をもって直接参加している。

vi/viii. 林業活動への農村参加など（略）

III. メキシコ宣言

第9回世界林業会議メキシコ宣言は、世界林業会議総局長カルロス v. カルバハル

氏によって朗読された。

宣言にもりこまれた主要点を拾ってみると次の事項であった。

①林業部門は、総合的社会開発（農村並びに都市において）の一部になるものでなければならない。②森林資源と社会との関係について新しく定義づける必要があるが、新しい林業戦略の中で必要な技術的、社会的、経済的、政治的变化を自覚して、人間の生存と自然環境を調和させる。③適正な行動によって、林業部門と他の部門との意志伝達システムを改善する。④農村住民にとって有利な所得源として、森林資源をもつことは特に開発途上国では必須かつ緊急である。真に独自の組織を推進することによってその欲求は満足される。なお、そうした組織に土地のない小農や婦人、青年を加えるべきである。⑤林業への新しいチャレンジができるように、新しい世代の専門家、技術者、労働者の層を形成し、改善していくべきである。⑥林業経営と他産業の活動とを調和させた総合的な農村開発を通じてのみ、社会の進展並びに資源保全に寄与することができる。⑦悪化した流域を復旧し、砂漠化と戦うために（特にアフリカ）伝統的林業を展開することが必要である。⑧本林業会議は、FAOによる熱帯林の活動計画の重要性と緊急性を強調し、次の5つの分野を優先させることを支持する。〈林業と土地利用/燃料とエネルギー/熱帯林生態系の保全/森林利用産業の開発/諸制度〉⑨森林の開発並びに環境保護のために、世界基金の創設（特に開発途上国）を支持する。⑩本林業会議は国際森林年の目的を支持し、各国政府にアピールする。⑪森林被害（特に山火事、病虫害）防止等について、全国的、国際的に幅広い対策を講ずる必要がある。

朗読が終ると会場内にはしばらく拍手が鳴り響き、本会議の最後を飾るのにふさわしく会場内は次第に興奮に包まれていった。

熱帯の有用樹種

熱帯農業研究センター
熱帯林業協会刊

A 5 判 上製 666 頁 図版 261 葉入 頒価 6,500 円（送料込）

本書は、熱帯アジア、熱帯アフリカおよび中南米産の樹木から有用樹種として厳選された 206 種につき、それぞれの樹種の地方名、分布状態、樹木の性状、木材の性質および用途について、詳細かつ平易に図版を入れ解説されている。研究や実務、特に熱帯林調査に携わる人、製紙、合板、製材等を扱う人に、極めて有用であるとの定評をうけている本邦唯一の熱帯樹木の書である。

発売所 (社) 大日本山林会 東京都港区 1-9-13 三會堂ビル
〒107 ☎ 03-587-2551

ご注文は——郵便振替 東京 9-5792——で直接お申込み下さい。